



端唄の会

蟹江尾八 リサイタル

令和6年7月27日(土)

開演 14時(開場 13時30分)

会場 メニコンシアターAoi

入場料 三〇〇〇円(全自由席)

主催 蟹江尾八音楽事務所

後援 愛知芸術文化協会 ナゴヤ劇場ジャーナル

日本郷土民謡協会東海地区連合会



[会場] **メニコン シアターAoi**

愛知県名古屋市中区葵三丁目21番19号



(JR中央本線)千種駅 地下鉄改札方面5番出口、徒歩4分

(地下鉄東山線)千種駅 5番出口、徒歩4分

(地下鉄桜通線)車道駅 4番出口、徒歩7分

端唄集 —三味線譜と解説—

〈第一巻〉(50曲)



〈第二巻〉(47曲)



〔著者・発行者〕
蟹江尾八

本日発売開始!!

[お問い合わせ]

蟹江尾八音楽事務所

名古屋市瑞穂区川澄町3-24-5

(052)853-0261

kanie@bihachi.jp

www.bihachi.jp

[スタッフ]

演出・構成
蟹江尾八

台本
上野茂

舞台監督
岡野憲右

音響
ザ・イアーズ

照明
若尾綜合舞台

舞台
コスモ コンサルタント

調弦
山とや



蟹江尾八
(民謡 端唄)
蟹江流家元

端唄は、かつて民謡や端唄が俗曲と呼ばれていた頃から、人々にとつてなくてはならない日本の音楽として培われてきました。曲名は知らなくても、どこかで聞いたような懐かしさ、そして粹と情け、また風刺を題材とした曲など、人々に親しまれてきました。酒宴では欠かせない役目を担う、我が国の民俗音楽のひとつです。

今回の舞台では、日本伝統楽器の三味線、箏、笛、鳴物と、日本舞踊によるお座敷音楽の数々をお届けいたします。

私は、かねてよりお座敷民謡や端唄俗曲を愛好してきましたが、女性の声の高さに適した三味線伴奏は、自分にとつては無理な発声で歌うこととなり、三味線の高さを下げればいい音が得られないというジレンマに陥り苦労してきました。

そこでこの度、第二部では三味線を短く改良し、男性伴奏に適した音の高さの伴奏で演奏することとしました。

またこれを期に、端唄俗曲集の二巻を三味線譜と解説付きで、発刊することとなりました。演奏家の方だけでなく、愛聴家の皆さんにも解説を見ながら端唄を楽しみ、尚一層興味を深めていただけたいと思います。

第一部 「宴を彩る座敷うた」

笛…沢田順二 鳴物…望月左登貴美

第一場 伊勢古市の賑わい

三味線…蟹江尾八 蟹江尾風 蟹江尾乃玉
蟹江尾花 蟹江尾葵

1 伊勢音頭

蟹江礼子

2 正調伊勢音頭

蟹江しほ

3 道中伊勢音頭別れの唄

蟹江尾馨

第二場 江戸のさわぎ唄

箏…野村祐子

4 かっぱれ

蟹江礼子
立方…内田千鶴美由

5 奴さん

蟹江礼子

6 梅は咲いたか

蟹江しほ
立方…内田千鶴静

7 三下りさわぎ

蟹江しほ

第三場 民謡と端唄の繋がり

8 名古屋甚句 本唄三題

蟹江尾八

9 大津絵 梅忠

蟹江尾八

10 菊と桔梗

蟹江尾八

第四場 蟹江尾八の創作端唄

箏…野村祐子

11 名古屋さわぎ

蟹江尾八

12 那古野の秋

蟹江尾八

第二部 「端唄で綴るうたは旅人」

台本…上野茂

蟹江尾八の弾き語り

ナレーション…小島範子
立方…内田るり千鶴
箏…野村祐子
笛…沢田順二
鳴物…望月左登貴美

1 梅にも春

立方…内田るり千鶴

2 春雨

3 香に迷う

4 紀伊の国

5 京の四季

6 夕暮 船に船頭入り

7 二上り新内 五万石入

8 紅葉の橋

9 茄子と南瓜

10 綱は上意

立方…内田るり千鶴

出演者



沢田順二
(笛)



望月左登貴美
(鳴物)



内田るり千鶴
(立方)



野村祐子
(箏)



蟹江礼子
(唄・三味線)



蟹江しほ
(唄・三味線)



蟹江尾葵
(三味線)



蟹江尾花
(三味線)



蟹江尾乃玉
(三味線)



蟹江尾風
(三味線)



蟹江尾馨
(唄・三味線)



小島範子
(ナレーション)

〔るり千鶴会〕 内田千鶴静 内田千鶴美由

第一部 「宴を彩る座敷うた」

◇第一場 伊勢古市の賑わい

伊勢音頭（三重県）

伊勢音頭は現在、「お木曳き木遣りの【伊勢音頭】」、「さわぎ唄の【正調伊勢音頭】」、「道中唄(別れの唄)の【道中伊勢音頭】」に分類される。

「伊勢音頭」は、伊勢神宮の二十年ごとに行われる式年遷宮しきねんせんくうの御神木のお木曳作業に歌われ始め、後に古市ふるいちや川崎かわさきの遊里ゆうりに入り、名古屋で変遷を遂げ土地の唄となった。

「正調伊勢音頭」については、文政年間（一八二〇年頃）のお伊勢参りの全盛期には参拜者が年間三五〇万人押し寄せた記録があり、地元じよんの古市、川崎の繁栄振りは想像できる。古市では備前屋、油屋、杉木屋、扇屋など有名な妓楼ぎろうがあり「さわぎ唄」として生まれた唄であると言われている。

「道中伊勢音頭」は、元々妓楼で賑やかな踊り唄として歌われたものらしく、「別れの唄」は道中唄が口説化した曲である。歌詞にある六軒茶屋は昔松坂の入り口あたりにあった茶屋のことである。

◇第二場 江戸のさわぎ唄

かつぼれ（俗曲）

願人坊主がんじんぼうずの豊年齋梅坊主ほうねんさいうめぼうずが、巨万の富を得た「紀国屋文左衛門」の真似をして、白い着付けに、浅葱色あさぎいろの投頭巾なげずきん、赤い鼻緒のつっかけ草履の扮装で、一団となり万燈まんとうをかつぎ「吉原」で踊ったことが流行の始まり。明治十（一八七七）年の頃である。

天保年間（一八四〇年頃）に江戸で住吉踊りが禁じられた際、同時期に流行っていた紀伊の民謡「鳥羽節」を取り入れて、新たな踊り「かつぼれ」が誕生したという。「鳥羽節」では「私しやお前に かつ惚れた」という囃子詞はやしごしがあり、この「かつ惚れた」から「かつぼれ」のフレーズが生まれたと考えられている。

国に広まったと記されていた。

これらの記述は、民謡研究家の「服部鋭夫」先生から聞いた話と同じで、蟹江尾八著「愛知県民謡集」の「名古屋甚句」の解説の証明となった。

明治時代、名古屋の大須、広小路、さらに伏見や堀川沿いの繁華街、南桑名町の「千歳座」、南伏見の「音羽座」、杉ノ町の「朝日座」、幅下橋詰町の「笑福座」、暨代官町の「京柳座」など、芝居小屋が並び立ち、他に小さな寄席がひしめき合っていた。「源氏芝居」の興行は年間に東京で七十回程度、名古屋へ帰り四十回近く、それだけでなく帰りの道中の町々でも行われ、その繁忙は今では考えられないことだった。しかしこれほど流行した「源氏節女芝居」の衰退にはどのような問題があったかは推測しかない。

なぜ「名古屋甚句」が多くの人々の心を掴んだか、またどのような歌詞を歌っていたのかと、ますます興味をひく。今回の舞台では古書から見つけた「東下り」「桑名船」をお聞きいただきます。

大津絵節 梅忠（端唄）

大津絵節の最大の特徴は、旋律や音階が著しく変化することにある。陽旋法ようせんぽうの旋律から陰旋法いんせんぽうの旋律に変化するのは序の口で、同主調の中での転調だけでなく、二度、四度、五度の転調を実に無造作にやっつてのけられ、少しも不自然でなく、より新鮮な魅力を感じる。また不思議なことに、三味線が陽旋法で、唄が陰旋法でその逆もしばしば行われている。

江戸後期の文化文政時代（一八〇四～三〇年）に大いにもてはやされた日本の代表的な音曲おんきょくで、民謡にも大きな影響を与え、各地でその地の民謡が生まれている。

この唄は、江戸時代の浄瑠璃や歌舞伎の作者「近松門左衛門」の浄瑠璃「冥土の飛脚」を題材とした曲。物語は、大坂の淡路町あわじまちの飛脚宿亀屋の養子忠兵衛は、新町の遊女梅川うめがわと馴染みとなり、男の意地から公金の四十兩の封印を切つて身請けをした。その後二人は忠兵衛の故郷の大和新口村やまとにのこむちらへ逃げるが捕らえられるという、人気の演目である。宝永六（一七〇九）年におきた事件をもとにしたも

奴さん（俗曲）

幕末の頃（一八六〇年頃）、願人坊主がんじんぼうずによって広められた俗曲。当時は伊勢音頭などと組み合わせられて歌われていたが、明治に入って「奴さん」として独立し流行を呼び、男踊り、女踊りの振りが付き、盛んに演じられるようになった。

梅は咲いたか（端唄）

歌詞も節もそつがなく万人に好まれた名曲で、浮き浮きしたその曲節は、自然と手振り身振りを誘う。花の吉原では「道行唄みちゆきうた」として宴席でよく歌われた。

三下りさわぎ（俗曲）

江戸の郭くわの中に限り歌われていた唄。「吉原さわぎ」とも呼ばれ、昔は他の花街では歌われなかったという。また、歌舞伎の中において廓などの賑やかさを表現する「下座音楽」としても使われた曲である。

その調子は、本調子と二上りの雰囲気兼備し、三下りが持つ粋と、奏法上の有利さとが結びつき、旋律的には「陰旋法」と「陽旋法」が微妙に組み込まれているのが特徴である。

◇第三場 民謡と端唄の繋がり

名古屋甚句と源氏節（愛知県）

浄瑠璃作家「木村茂」著書の「よみがえる源氏節」を最近貰い受け、今まで浅い知識だったが、「源氏節」がいかに人々の娯楽に溶け込んでいたということが理解出来きた。

「説経節」と「新内節」から生まれた「源氏節」は、「娘芝居」とも「娘手踊り」とも言われ、明治時代初期に名古屋枇杷島わじまあたりが発生の人形芝居で歌われ、哀愁に満ちていて大衆を酔わせた。その幕間に「岡本美代治」という美声の女弟子が歌う「名古屋甚句」が大受けし、全国的に人気を得たことから「名古屋甚句」が全

ので、歌舞伎では「恋飛脚大和往来」として上演された。

菊と桔梗（山形県）

山形県の民謡として知られているこの曲は、文久の頃（一八六一～六四年）寒河江がえに住んでいた鶴沢政の市が、上方の最上紅の買い付けに来た商人から習い覚えたと言われ、後に祝儀の席で歌われる祝唄になった。

「菊と桔梗」は「いよふし系」と言われる唄で、幕末期に全国的に広まった流行歌。町田佳聲まちだかしやう氏の説では、原調は文化十二（一八一五）年、江戸の中村座で上演された長唄「天下る傾城」の中に挿入された「稲穂拾いて雁が音二つ・・・」の部分の旋律で、この歌詞は文政五（一八二二）年刊行の端唄集「浮かれ草」にある「宮参り」という唄の替唄として記載されていることを見出し、この端唄が原調であると語っている。

この唄が各地の里唄として残されており、はっきり「いよふし」と分かる曲もあれば、何となく匂いを感じる曲もある。代表的な曲は「伊予節松山名所（愛媛県松山市）」、「花は上野（東京都上野）」、「稲穂拾いて（天下る傾城）」、「奥州街道（福島県福島市）」、「宝船（秋田県由利）」、「巡礼おつる（徳島県鳴門市）」などがある。

◇第四場 蟹江尾八の創作端唄

名古屋さわぎ（蟹江尾八／採譜・編曲）

この唄はもともと「名楽園小唄」として作られたお座敷唄である。渡辺綱雄わたなべつなお／作詞、杵屋喜鶴きやまきつる／作曲、杵屋六信きやまむつしん／唄、西川鯉三郎にしがわいさぶろう／振付でS Pレコード化されたものから、蟹江尾八が歌詞を読み取り三味線の手を付け復元した。

大正十二（一九二三）年に大須にあった「旭遊郭」を中村に移転し「中村遊廓」として開業。建築物も堂々たる大廈高樓たいかこうろうとなり、一切の設備も完備して一大遊廓となった。貸座敷は百三十九軒あり、娼妓しょうぎは千六百五十人、当時の敷地は三万坪超で、あの吉原を凌駕する広さだった。戦後「中村遊郭」から名を変えて「名

楽園」とし、大門、ことぶき、賑町、羽衣町、日吉の五つの通りに戦火を免れた青楼が八十八軒、娼妓は八百四十三人。国宝的な妓楼「四海波」をはじめ、稲本、一徳、豊稲など堂々たる家並が続いていた。当時の花柳界の発展が名古屋文化の盛隆の一辺を築いた。

那古野の秋（蟹江尾八／作曲・補作詞）

この唄は、江戸時代名古屋三大祭りといわれた「若宮祭」を歌った曲で、他には「丸之内天王祭」、「東照宮祭」があり、それぞれの山車が登場し名古屋城本町通りを中心に行われていた。

若宮祭は権現様から若宮までの祭礼行列がおこなわれ、山車には「左甚五郎」のねむり猫、オランダ羅紗の水引などが見どころで大いに賑わいを見せた。この歌詞の一部は、当時流行った「十日戎」の替唄で歌われていたものを、平成二十三（二〇一）年、蟹江尾八が補作し曲をつけた。

第二部 「端唄で綴るうたは旅人」

◆蟹江尾八の弾き語り

梅にも春（端唄）

若水汲み、鳥追、遠音神楽など江戸の正月風景を描きながら、花街の女性の心情を歌った、端唄を代表する唄である。

「井戸車」は、井戸の上に車を釣り、網を下げ、その両端に釣瓶をつけたもの。「鳥追」は、江戸時代の年初めに女太夫が三味線を弾き、祝い唄を歌って戸口に立ち、銭を乞った女性をいう。「辻占」は、小さな巻紙に吉凶を書いたもので、吉原で売られていた。

作詞作曲は高橋桜洲。明治時代の浄瑠璃太夫で江戸浄瑠璃の一派江戸節の名手と言われた。

夕暮 船に船頭入り（端唄）

端唄の代表曲として有名であるが、安政四（一八五七）年の「花哇一夕話」歌沢能六斎著「最初歌舞伎狂言」鏡山「岩藤の場の下座に使われた上方唄と記され、元は「上方端唄」で、後に「江戸端唄」として洗練された曲調になった。

元唄は「あれ鳥がなく鳥の名も、都といふ字があるわいな」であった「待乳山」は隅田川の左岸にあって、古くは松山との由である。

二上り新内（端唄）

「新内」のように哀調を帯びた曲節を二上り調子の三味線で歌う。「浄瑠璃としての新内」は本調子が基調なのに対し、この唄は「二上りで弾く新内風」としてこの名が付けられた。文政六（一八二三）年頃、名古屋で流行したと伝えられている。

紅葉の橋（端唄）

秋風が立染める頃、江戸っ子は向島の百花園での七草見を楽しみ、またいろいろな所で虫の音を味わう「虫聞き」が風流人士の中で流行っていた。

秋と言えば紅葉、江戸で紅葉の名所は下谷の「正燈寺」と品川の「海晏寺」で、正燈寺のそばには「吉原」、海晏寺のそばには「品川遊郭」があり、いうまでもなく紅葉狩りは、廓通いの「だし」に使われていたようだ。その中で武士から町人まで、吉原は天下御免の社交場、遊びが芸を生み、文化を育み、江戸っ子は洒落と粋に命をかけ、遊びは粋にと決め、風流を愛する江戸庶民に持て囃された端唄である。

明治十二（一八七九）年のこと、アメリカの南北戦争で北軍の最高司令官として活躍し、勝利を呼んだ名将で、その後第十八代アメリカ大統領となった「ダラント將軍（一八二二〜八五年）」が、大統領辞任後の外遊で日本を訪れた折、芸妓により端唄「紅葉の橋」の総踊りが披露され、襦袢の袖を「星条旗」で染め抜いた片袖に感激したという逸話が残っている。

春雨（端唄）

春宵の情景を詠い、梅と鶯を男女に見立て、派手の中に上方風のしっとりとした味わいを持った端唄の代表曲。作者は弘化三（一八四六）年、柴田花守が引田屋にて作られたといわれ、丸山遊女の「おかつ」が節をつけたと言われている。

香に迷う（端唄）

江戸時代、弘化（一八四四〜四八）から安政（一八五四〜六〇）にかけて「春雨」とともに流行した。後に「下座（手品の合方）」として使われた。新春の華やかさの中に、しっとりとした味があり、歌意は梅と鶯、懸想文と薄氷、さらに百夜通い「雪に思いの深草の」の素材を綴り合わせながら、男女の情を濃厚に描いている。

本来は「御所車」という上方端唄が江戸端唄となり「香に迷う」と曲名を変えている。懸想文とは、江戸時代、正月に烏帽子姿で懸想文売りが売り歩いた「お札」である。もとは花の枝につけた艶書であったが、後に細い畳紙の中に洗米を二〜三粒入れ、男女の良縁を得る縁起としたものであった。

紀伊の国（端唄）

歌い出しは「神おろし」の祈祷文の一節から取り入れ、「玉姫」「三囲」「合力」「袖摺」「真崎」「九郎助」の吉原界隈の各稲荷を綴り合せ、狐の嫁入りの様子を巧みに詠い上げた名曲で、幕末のころ作られた。作者は不詳。

京の四季（端唄）

文久（一八六一〜六四）の頃、祇園で遊んでいた儒教の学者中島棕隠の作詞である。京都祇園を中心に、東山や圓山の風物詩を詠い込み、優雅な曲想で京都の代表的な曲である。中島棕隠は江戸時代後期の儒学者・漢詩人・狂詩作家である。

茄子と南瓜（端唄）

江戸端唄には艶ものや四季もの、また滑稽なものなど、社会を風刺した曲も多岐にわたり歌われた。この曲は世間によくある地主と借家人のもめ事を面白おかしく表現し、幕末から明治にかけて流行した。

綱は上意（端唄）

平安中期の武将「源頼光」の四天王の一人「渡辺綱」と、鬼神とのすさまじいまでの格闘を歌い上げ、その重厚な趣が一転して、遊びに出かける亭主と、それを引き止めようとする女房との痴話喧嘩にすりかえられている。その面白さは、まさに吉原の風情と言える。